

学部・研究科名 農学研究科・地域環境科学研究科

学部長・研究科委員長名 坂田洋一・大林 宏也

学科名・専攻名 林学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 講じている ☒ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	シラバスの内容の点検をしながら授業計画・内容に関する検討を実施している。専攻会議他を活用した検討に加え、各分野・研究室間における意見交換等も実施し、体系的な編成を構築するように全教員が取り組んでいる。	各研究テーマの進め方等、大学院生との修学にあたっての協議を継続的に実施している。 大学院生への教育・研究支援は、所属研究室において計画的に行っている。	履修科目に関する授業への出席、試験、課題等を通して成績評価、単位認定を行うとともに学位論文審査を通して学位授与を行っている。さらに分野を超えた専門的知識を有する外部有識者との連携も図っている。	学生の修学状況を把握しながら学習成果を評価している。 専攻内の所信発表会、中間発表会および修士論文発表会などを通じ、学位授与方針を満たしているかどうかの判断に差異が生じないように専攻内で議論している。また、研究室内での発表によるプレゼンテーション能力の向上を図っている。	各シラバスの内容の定期的な点検、講義計画・内容の検討を通じた教育の改善・向上を実施している。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 シラバス内容の点検を通して授業の計画・内容の検討・改善に取り組んでいる。	【長所】 各学生の研究の進め方・方向性等、修学の推進に貢献できている。	【長所】 各専修分野を中心としながら実施することによる、より専門的な評価・認定の向上を実現している。	【長所】 各学生に対する個別対応による学習成果の把握・評価の向上を実現している。	【長所】 定期的な点検による教育の内容・指導方法の改善・向上に寄与している。
	【特色】 授業の計画・内容の向上に繋がる。	【特色】 各学生の個別の状況に応じた修学の確保に繋がる。	【特色】 大学院生に対する専門知識の高度化・深化に繋がる。	【特色】 大学院生のテーマに合致した学習成果を適切に向上するプログラムを計画している。	【特色】 定期的な点検・評価による PDCA サイクルを通じた教育の内容・指導方法の改善・向上が期待される
現状説明を踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 コロナ禍の影響はほぼ終息しつつある。	【問題点】 コロナ禍の影響はほぼ終息しつつある。	【問題点】 コロナ禍の影響はほぼ終息しつつある。	【問題点】 とくに無し。	【問題点】 なし
	【課題】 さらに効果的な指導方法の確立を目指していく	【課題】 複数の教員によるチームサポートの実現を構築するとともに、最新の研究対応に伴った教育支援体制を検討。	【課題】 非常事態下における学習評価の理念・手法の確立。	【課題】 新研究科移行に伴う、新たな授与方針の確認・確定作業。	【課題】 さらなる充実を期すための創意・工夫。
根拠資料名	◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス、◆専攻 3 ポリシー	◆院生によるレポートおよびアンケート	◆学位論文審査に関する記録他	添付資料「中間・所信発表会プログラム」、◆専攻 3 ポリシー	◆「シラバス記載内容の第三者によるチェックについて（回答）」

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	入学者選抜制度や試験科目等の見直しおよび問題の難易度に関する検討を実施している。入学者選抜にあたっては他大学からの受験者に対する考慮もしながら、公正に実施している。 Ⅰ期入試においては、準備不足や曖昧な研究テーマな受験生がみられることもあるが、その後卒業時までの研究経験と期間で進学意欲が高まる学生も同様にみられるため、Ⅱ期試験における受験希望者の扱いと入学希望者の拡大にも注力している。特に学外に本専攻の研究内容を PR し、学外からの受験生の確保にも努力を続けている。	入学者選抜試験時に点検・評価を実施するとともに毎年、学生の受け入れの適切性について点検・評価を実施している。学部学生や博士前期課程の学生に対する進学受入れの意欲向上に向けた専攻内での相互点検も実施している。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 公平・公正な選抜制度の運用に努力している。 社会情勢、経済状況に対応しながら制度・体制を整備し、能動的に取り組んでいることは長所として捉えている。	【長所】 定期的な点検・評価による学生の受け入れに関する改善・向上に繋がる。
	【特色】 社会情勢、経済状況の変化に対応した柔軟な制度・体制づくりが期待できる。	【特色】 定期的な実施による PDCA サイクルを通した改善・向上が期待できる。
現状説明を踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 コロナ禍の影響はほぼなくなり、各学生、院生の研究に対する意識や能動的な研究姿勢の啓蒙に努めている。	【問題点】 ほぼ毎年、心理的ストレスを有する大学院生がみられている。心理カウンセラーによる対応を必要とする院生の把握と適切な指導および支援方法の検討。
	【課題】 研究科の改組に伴う学位名称の変更をはじめ、受験生には各分野の主たる領域、従たる領域を明確に理解してもらう広報戦略を課題として考えている。	【課題】 教員間で情報を共有しつつ、協力しながら具体的に解決していくことが必要である。専攻内に教育点検の委員会を設置し、検討を継続する。
根拠資料名	入試説明会の開催 ◆大学院入試募集要項、HP 等、◆専攻 3 ポリシー	◆入試選考委員会実施記録等

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	林学専攻教員組織の編成方針を作成し、公表している。 基本的に毎週実施している専攻会議において、随時実施している。	教員数が減少するなか、主幹となる科目を中心に専任教員を配置し、不足を非常勤講師で補うなど、適切な編成に努力している。 研究室単位でバランスの取れた教員の年齢構成に心がけている。 教員の授業負担に配慮しながら時間割編成するよう努めている。	教員の昇任は専攻教授会を中心に検討し、指導教授により構成される委員会にて適切に決定している。	研究室単位で発表会を行うなど、若手教員の FD 向上がみられる。 専攻独自に FD 研修会などは開催していないが、積極的に学内の FD 講習会に参加し、参加の推進もおこなっている。 授業評価アンケート実施とその結果を適正に認識して学生指導している。	教員の研究業績、社会活動について専攻内で共有し、点検・評価することを毎年奨励している。 若手教員指導体制が確立するよう意識した活動を計画している。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 教員組織の編成方針作成による編制を明確化している。	【長所】 専修分野に対応した教員組織の明確化に繋げている。	【長所】 会議を通した情報の共有・議論の展開に寄与している。	【長所】 会議を通した議論・検討の機会を確保できている。	【長所】 定期的な点検・評価による教員組織の改善・向上に寄与している。
	【特色】 フィールド調査および屋内実験等での研究指導を実施するなど、学生の学習と研究への貢献を実現している。	【特色】 学生の研究に繋がる指導が可能な教員配置を意識している。	【特色】 特になし。	【特色】 特になし。	【特色】 特になし。
現状説明を踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 特になし。	【問題点】 教員数の定数が、現在の学生対応として、教育の量的・質的な低下をもたらしつつある。	【問題点】 特になし。	【問題点】 各雑務の増大が、研究、教育時間の減少のみならず、教員間のコミュニケーション時間の低下もまねく傾向がある。	【問題点】 特になし。
	【課題】 上記の取り組みの継続的な実施。	【課題】 研究室全体での研究・教育・指導を念頭にした教員配置計画を策定する。	【課題】 雑務の増大により論文の執筆活動が停滞している教員も散見されるため、論文執筆を促すための具体的な工夫が必要。	【課題】 効率的な事務作業等を検討し、充分なコミュニケーションを図る。	【課題】 若手教員の研究力向上のための検討を継続する。
根拠資料名	専攻教員配置表 大学院教員名簿、学生便覧、HP 等	専攻教員配置表 大学院教員名簿、学生便覧、HP 等	専攻教員配置表、学生便覧、HP 等	専攻会議資料	専攻会議資料

学部・研究科名

地域環境科学研究科

学部長・研究科委員長名

大林 宏也

学科名・専攻名

農業工学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	農業工学専攻博士前期課程では、農業工学に係わる技術者、研究者あるいは教育者としての総合力を確立し、地域資源利用学、生産環境・計画学、施設工学、農業生産システム工学における専門知識と、研究および論文作成手法を修得するための科目を体系的に配当し、コミュニケーション能力を増強できるカリキュラムを編成している。また、博士後期課程は、農業工学に係わる研究者、高度な技術者あるいは教育者としての総合力を確立し、農業工学の専門的課題を自ら解決できる能力を獲得させるため、問題抽出能力、分析能力、企画能力を養うことを目的とし、コミュニケーション能力や問題解決能力を増強できるカリキュラムを編成している。	専攻全体で行う行事では、学生、教員間の研究交流を重視し、円滑な情報交換により学習効果を高め、活性化する活動に重点を置いている。前期には博士前期課程・後期課程合同で研究発表会を実施し、研究の進捗状況を確認するとともに、他者の研究に触れさせることで教育指導効果を高めている。 大学全体で実施している大学院生研究発表会への参加を学生・教員の双方に促し、研究の相互理解を深めるよう取り組んでいる。	農業工学特別演習や農業工学特別研究については、主査と副査のみならず、大学院担当教員全員の出席のもとに開催される中間発表や最終発表に基づいて、大学院担当教員全員で成績評価とともに単位認定を行い、学位授与の可否を決定している。特に博士論文の審査報告概要並びに審査報告会実施記録においては、主査が作成した後、全ての大学院担当教員が確認し、提出している。	博士前期課程では、研究科が定める所定の単位を修得し修士論文を提出するとともに、農業工学に関する専門知識と研究能力を有し、国内のみならず海外の現場での農業工学の専門領域における技術開発や問題解決に役立てる能力を備えた学生に修士の学位を授与している。また、博士後期課程では、研究科が定める所定の単位を修得し博士論文を提出するとともに、農業工学に関する高度な専門知識と優れた研究能力を有し、国内のみならず海外の現場での農業工学の専門領域における具体的な問題解決に資する高度な能力を備えた学生に博士の学位を授与している。	大学院生による授業評価をセメスターごとに実施しており、その結果を受けて優先的に対応すべき課題の抽出と分析を行い、改善計画を提出している。併せて、作成した改善計画に基づき、指導・授業を実施し、次回の授業評価で対策の効果を検証するサイクルを継続している。 今年度も農業工学専攻会議を毎週開催し、学生教育・指導に対して迅速な対応を取り改善・向上を図った。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 ・博士前期課程では農業工学に係わる技術者、研究者あるいは教育者として、また博士後期課程では、農業工学に係わる研究者、高度な技術者あるいは教育者としての総合力の確立を目指している点。	【長所】 ・別の専攻の学生との交流が活発になり、研究生活での学生の孤立が避けられる点。	【長所】 ・学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に基づいて、成績評価とともに単位認定を行い、学位授与を決定している点。	【長所】 ・農業土木および農業機械、環境情報分野の学問を基軸として、国内のみならず海外の現場での技術開発・問題解決と学術的な研究を両立できる高度な能力を持った人材の輩出を目指している点。	【長所】 ・受講生である大学院生の評価に基づいた改善計画を立案できている点。
	【特色】 ・地域資源利用学、生産環境・計画学、施設工学、農業生産システム工学の4つの専修で構成し、専修ごとに高度な専門教育を行っている点。	【特色】 ・多くの専攻の学生が一堂に会することから、大学全体での一体感が育まれる点。	【特色】 ・専攻内にある4つの専修が合同で学位審査を行っていることから、幅広い見地で評価が行われている点。	【特色】 主査と副査のみならず、大学院担当教員全員の出席のもと、中間発表や最終発表を実施し、学習成果とともに研究成果を評価している点。	【特色】 ・1専修あたりでの学生数が少ないことから、専修全体でのイベントにおいて学生、教員間での交流を密にすることを心掛けている点。

現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・受講生の少ない科目については、回答した院生を特定できてしまうため、回収率が低く、また、回答内容の信憑性が低くなっている可能性がある点。
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・大学院授業評価の方法や回答率の向上。
根拠資料名	・開設科目（A1-①-1） ・カリキュラムツリー（A1-①-2） ・シラバス(例)（A1-①-3）	・大学院生研究発表会（A1-②-1） ・中間発表会（A1-②-2） ・修士論文発表会（A1-②-3）	・学位論文審査報告会実施記録(例)（A1-③-1）	・中間発表会（A1-②-2） ・修士論文発表会（A1-②-3） ・修了判定根拠資料（A1-④-1）	・授業評価アンケート結果（A1-⑤-1） ・授業改善計画書（A1-⑤-2） ・専攻会議議事録一覧（A1-⑤-3）

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	農業工学専攻では、以下の学生受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制（推薦入試、一般入試等）を適切に整備し、公平に入学者選抜を実施している。	満足度評価を年度末に実施しており、その結果に基づいて学生受け入れ時の事前相談や説明会内容の適切性について評価を行っている。さらにその結果を踏まえて、定期的に学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）の見直しを行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・いくつかの入学者選抜制度があり、多様な人材の受入を目指している点。	【長所】 ・なし
	【特色】 ・JICA が斡旋している SDGs グローバルリーダーなどのプログラム参加留学生の受入れなど、海外においても活躍できる人材の育成にも努めている点。	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・工学分野では求人が多く、就職率が高いため、日本人学生の進学率が低い点。	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・優秀な日本人学生の進学率を向上させること。	【課題】 ・優秀な日本人学生の確保につながる受入れ方法の確立。
根拠資料名	・募集要項（A2-①-1） ・大学院入試説明会（A2-①-2）	特になし

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	教員組織の編制に関する方針として、農業工学専攻では、以下を明示している。 農学研究科の教員組織の編制方針を踏まえるとともに、農業工学分野における保有する博士学位や高度な専門能力及び論文作成指導能力に加え、国際化に対応しつつ、人類が直面する農業農村開発と自然環境の保全との狭間で生じる地球規模の諸問題の複雑化に合わせて、多様な教育・研究を展開する教育体制を構築し、建学の精神「人物を畑に還す」のもと、国内だけでなく、世界各国、地域で活躍する優れた高度な人材を育てることを目的として、農業工学分野における高度な専門的能力と学識を備えた研究者及び技術者を養成する研究室体制を構築し、その維持・向上に努めている。 1. 法令（大学院設置基準等）で定められている要件を満たす教員 2. 本専攻の「教育研究上の目的」、「教育目標」及び「3つの方針」を十分理解し、それらに対応する能力と意欲を備えている教員 3. 農業工学分野における高い研究業績を有するとともに、本専攻の構成員として各種運営業務に積極的に取り組める教員	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制している。	資格審査基準等に則り、適切に教員の募集、採用、昇任等を行っている。人事は学部で行っており、2023 年度には 2 名の新規採用のための公募を実施していた。昇格については専攻内で推薦者は 1 名であった。	修士論文・博士論文中間発表会や年度末の修士論文発表会、博士論文専攻内発表会や公開発表会など、専攻全教員の参加のもと実施することで、研究視野の拡充に努めている。 学部国際化委員会が主催する外国人教授による基調講演、コロキウム等により、国際感覚を醸成するとともに、共同研究のシーズを探索する場を提供している。	東京農業大学自己教育評価において、定期的に教員個人の点検・評価には取り組んでいる。 教員組織の適切性については、教育システム評価委員会により点検・評価の機会がある。2023 年度は開催しなかった。改善・向上に向けた取り組みは専攻委員会において検討することになっている。

現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・女性教員や外国国籍の教員の採用を積極的に進め、多様性を確保しつつある点。	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・多様な研究に触れる機会の増加 ・共同研究の可能性の増加 ・英語に接する機会の向上	【長所】 ・なし
	【特色】 ・英語も活用するなどして留学生の満足度を高めるのと同時に、日本人学生の国際意識の高揚に努めている点。	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・研究交流が活発化し、研究者としての資質が向上する。	【特色】 ・なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	・教員組織の編成方針（A3-①-1）	・指導教授一覧（A3-②-1） ・所属教員一覧（A3-②-2）	・昇格に関する業績等調査依頼・回答書（A3-③-1）	・中間発表会（A1-②-2） ・修士論文発表会（A1-②-3） ・学部国際化推進の活動（A3-④-1～5）	・自己教育評価依頼（A3-⑤-1）

学部・研究科名

地域環境科学研究科

学部長・研究科委員長名

大林 宏也

学科名・専攻名

造園学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針(カリキュラム・ポリシー)に基づき、各学位課程に相応しい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行なっているか。	学位授与方針(ディプロマ・ポリシー)に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行なっているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行なっているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	2021 年度からの新体制(地域環境科学研究科造園学専攻)に基づき、新カリキュラムを施行している。専攻内における専門性を高めるとともに、造園学の幅広さと社会的位置付け等体系的理解度の向上を継続的に実施している。	研究の進捗状況に応じ、博士前期・後期課程の発表会、意見交流会を実施し、教員・院生相互の状況把握や問題点の確認などを積極的に取り組む仕組みを構築している。また全学大学院研究発表会での発表を専攻所属大学院生全員に義務付けている。国際デザインワークショップに希望する大学院生達が参加した。	専攻内の教員が評価基準に基づき成績評価を行なっている。また学位授与に際しては東京農業大学大学院規定の評価基準に基づき審査を行なった上で、専攻内会議での十分な議論に基づき最終評価を実施した。	研究の進捗状況に応じ、博士前期・後期課程の発表会、意見交流会を実施し、教員・院生相互の状況把握や問題点の確認などを積極的に取り組む仕組みを構築している。また、指導教員は各院生の学習状況を十分に把握し、研究成果を学会などで発表するよう積極的に指導を行なっている。	授業や論文指導などの改善について大学院生からの意見も含めて検討を行なっている。実験・演習スペースの拡充を図るためにサイエンスポート内に設置した演習室 A、B、C の整備を継続的に実施している。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 ・造園学の社会的役割を再認識し、専門性を深化してきた。	【長所】 ・院生における国際感覚の醸成や研究発表の意義の理解が進んだ。	【長所】 ・多面的かつ客観的な評価を実施している。	【長所】 ・学位授与方針に基づく学習成果の評価を適切に運用している。	【長所】 ・定期的かつ継続的な点検・評価の実施により、専攻全体における学習状況や研究実績の状況確認を可能にしている。
	【特色】 ・造園学の特色である広範な分野の理解とそれに基づいた専門分野の特徴の明確化を行なっている。	【特色】 ・大学院生自身により専門領域の確認や妥当性の検証を行なった。	【特色】 ・多様な観点から厳正な評価を行なった。	【特色】 ・明瞭かつ公正な評価のあり方を常に確認した。	【特色】 ・大学院生からの意見なども反映させることで、適切性の担保に努めた。
現状説明を踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・博士前期課程の現行カリキュラムについて、専門性と総合性のバランスを図る検討の継続が必要である。	【問題点】 ・継続的な実施を可能とする体制作り及び予算措置は必要である。	【問題点】 ・教員の専門分野以外の研究に対して、評価内容の検証が必要である。	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・研究環境、特に実験・演習スペースが十分とはいえず、更なる確保の検討が必要である。
	【課題】 ・2021 年度開始のカリキュラムについて、その学習効果の点検・改善検討を行う。	【課題】 ・教員及び大学院生内の更なる意識改革を進める。	【課題】 ・評価内容の検証を継続的に実施すること。	【課題】 ・特になし	【課題】 ・サイエンスポートにおける実験・演習スペース充実のための継続的な検討に努める。
根拠資料名	大学院カリキュラム	大学院研究発表会資料 意見交換会実施報告	大学院研究発表会資料	専攻 3 ポリシー	サイエンスポートの研究室配置

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針(アドミッション・ポリシー)に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行なっているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行なっているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	造園学専攻博士前期課程では、造園学に対する興味と意欲を有し、都市から自然地域における快適な環境をもたらすための知識と課題解決能力を持って研究を推進できる人材の育成を目指している。 大学院教育に興味を有する学部生に対して入試説明会や大学院論文発表会への参加を促している。事前入試説明会をⅠ期・Ⅱ期それぞれに実施し、かつ公正な入試の実施に努めた。	大学院Ⅰ期・Ⅱ期入試前だけでなく、大学院受験を希望する学生は卒業論文に関する相談を緻密に指導教員と実施するよう指導している。また専攻内教員間における日常的な議論を重視し、適正性関する取り組みを行なっている。学外からの志望者に対しては、研究生としての学習機会の確保を推奨している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学部生に対して早い時期から大学院進学に関する情報を与えることにより、より意欲の高い学生を確保することが可能となる。	【長所】 ・教員による丁寧な大学院指導ができています。
	【特色】 ・大学院における専門教育への理解を早期から高めることで、研究意欲の高い人材の発掘につながる。	【特色】 ・学力のみならず、面談実施により志望者の研究に対する意欲をより適切に評価できる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・本学学内学部生の進学率をより高める必要がある。一方、これは学部生の高い就職率の影響でもある。	【問題点】 ・留学生や海外からの応募者において、研究能力が十分であるかなどの検証が困難なケースが見受けられた。
	【課題】 ・長期履修制度などを利用した社会人入学制度の案内等も積極的に行う必要がある。また学部生に対する大学院教育や研究の魅力発信を強化する必要がある。	【課題】 ・受験希望者(特に海外からの留学生志望者)に対しては、可能な限り早い時期から複数回、対面での相談などを実施し、研究能力や修学の意味確認をより密に実施することが重要である。
根拠資料名	2024 年度大学院案内 大学院入試募集要項	指導教員の連絡先の開示

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	専門分野ごとに、適切な人材が配置されるように定期的な会議を開催し議論している。また、大学の理念・目的、研究科の教員組織の編制に基づき、専攻の教員組織の編制方針を作成し、本学の大学院案内やホームページ上で公開している。	大学内の他分野に追随できる、より高度な研究力を有する大学院指導教授有資格者の確保が必要である。	大学院指導教員の資格を有する教員確保に向けた長・中期ビジョンに基づき、嘱託教授 1 名の採用承認を得た。	国際的視野も含め、本学造園学専攻の教育・研究方針のあり方について常に議論し、その方針に基づいた人員配置ができるよう努めた。	定期的に大学院指導教授会議を実施し、適切な教員配置について議論した。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 ・複合的な専門指導体制が構築できる。	【長所】 ・学部における教員編成の充実化に影響する。	【長所】 ・教員採用、昇格に伴う教育研究活動の展開が可能となる。	【長所】 ・研究力・教育力の高い教員の採用を図るよう、今後の大学院教育のあり方について検討を重ねている。	【長所】 ・学科内指導教授及び大学院指導関係者間においても議論を行なっている。
	【特色】 ・専門性の異なる人材の配置で多様な教育・研究体制が構築可能である。	【特色】 ・新たな教員確保に伴う大学院教育の充実化を可能とする。	【特色】 ・教員の採用、昇格に伴う専攻内の教育研究活動の活性化が図られた。	【特色】 ・大学院教育のあり方について研究室及び分野、専攻内での検討を行い、検討内容の共有を図った。	【特色】 ・教員組織の適切性に関する議論を継続している。
現状説明を踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・今後、専攻内の教員数を十分に確保することが困難な場合が想定される。	【問題点】 ・今後、専攻内の教員数を十分に確保することが困難な場合が想定される。	【問題点】 ・今後、造園学を修めた専門家の減少が危惧されている。	【問題点】 ・日本国内の造園の特色を発信できる国際レベルの研究力が不足している。	【問題点】 ・研究論文以外の学内活動やプロジェクト成果の評価判定が難しい。
	【課題】 ・大学院指導教員の資格を有する教員確保に向けた研究環境の拡充を図る必要がある。	【課題】 ・大学院指導教員の資格を有する教員確保に向け、長・中期ビジョンに基づく検討を継続的に実施する必要がある。	【課題】 ・高い研究力・教育力を有した大学院指導教員の採用が必要である。	【課題】 ・高い研究力・教育力を有した大学院指導教員の採用が必要である。	【課題】 ・研究テーマに応じた柔軟な指導体制など、新規性の高い教育方法を見出す必要がある。
根拠資料名	学科(専攻)の教員体制	学科(専攻)の教員体制	学科(専攻)の教員体制	学科(専攻)の教員体制	学科(専攻)の教員体制

学部・研究科名地域環境科学研究科

学部長・研究科委員長名大林 宏也

学科名・専攻名地域環境科学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 講じている ☒ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	専攻設置時に文科省に提出した「設置の趣旨等を記載した書類」および事前相談資料「③教育課程等の概要」、「⑤授業科目の概要」に記載したカリキュラムポリシーおよび授業等科目群にしたがって、教育課程を体系的に編成している。	講義科目と実験・演習科目との関連性を確認し、必要に応じて講義資料等の見直しを行っている。専攻会議を定期的に開催し、指導等教育全般について、専攻教員間で情報を共有・確認している。	シラバスに成績評価基準を明記し、それに従った評価および単位認定を行っている。博士前期課程、後期課程ともに定期的に中間発表会を実施し、研究の進捗状況の確認を行っている。	ディプロマポリシーを考慮した履修モデルに基づいた科目履修を指導している。学位論文については、研究室内に加え専攻として定期的に中間発表会を実施し、研究の進捗状況の確認を行っている。	専攻教員全員が参加する専攻会議において教務関連事項について審議し、適宜改善を行っている。今年度も専攻内の全学年の中間発表会を実施した。また専攻会議において、必要に応じて教育内容や方法について協議した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 「地域づくりを担うリーダーの育成」を意識した教育を実施している。	【長所】 シラバスに沿って実施しているため、長所や特色は特にない。	【長所】 シラバスに沿って実施しているため、長所や特色は特にない。	【長所】 指導教員ならびに研究室で研究の進捗を適宜把握するよう努めている。	【長所】 中間報告会および最終報告会は公開形式とし、研究分野を超えた質疑や批評の機会を設けている。
	【特色】 講義科目と実験・演習科目を学年ごとに適宜組合せ、実践的教育を行っている。	【特色】 シラバスに沿って実施しているため、長所や特色は特にない。	【特色】 シラバスに沿って実施しているため、長所や特色は特にない。	【特色】 ディプロマポリシーを意識し、地域づくりに資する人材育成を行っている。	【特色】 講義科目と実験・演習科目を適宜組合せ、実践的教育を行っている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 野外フィールドを有する研究では、コロナ禍で実施されていた調査活動の制限を解除し実施した。	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 授業評価アンケートの結果を教育指導の改善に活用する。
根拠資料名	学生生活ハンドブック [カリキュラム] 教育研究上の目的・教育目標・3 ポリシー	シラバス 令和 5 年度 地域創成科学 専攻専攻会議議事録	シラバス	履修のてびき 教育研究上の目的・教育目標・3 ポリシー	令和 5 年度 地域創成科学専攻 専攻会議議事録

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	理系、文系を問わず、「地域づくり」に積極的に取り組める学生を広く募集し、学力選抜試験を行っており、その結果を公表している。 英語については「筆記試験」もしくは「TOEIC スコア」の による評価とし、出願者に選択してもらった。 ただし令和 6 年度からは、英語力をより公正に測定する目的で TOEIC スコアに統一する。	入試選考会議は全教員が参加することとしており、学生の受け入れの適切性は担保されている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 大学案内では、「地域づくり」をキーワードとした専攻紹介を行い、アドミッションポリシーを意識させている。	【長所】 理系、文系を問わず、幅広い人材を募集している。
	【特色】 特になし。	【特色】 「地域づくりの担い手となるリーダー」を目指す学生を募集している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 令和 6 年度入学者については、博士前期、後期課程ともに定員数を満たすことができた。志願者確保に向けて引き続き広報活動を積極的に行う。	【課題】 特になし
根拠資料名	大学院案内 Brochure 2023 教育研究上の目的・教育目標・3 ポリシー	令和 5 年度 地域創成科学専攻 専攻会議議事録

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学及び本研究科の教員組織の編制方針を踏まえ、本専攻の教育研究上の目的、教育目標及び3つの方針を十分理解し、それらに対応する能力と意欲を備えている教員を配置している。	地域創成科学を構成する各々の学問領域において、優れた教育・研究能力を備え、地域創成科学の発展に貢献できる教員を配置している。	退職教員の後任人事を公募し、助教（任期付）の正式採用に至った。准教授と助教の教員に対して、毎年業績調査を行い、昇格について専攻教授会で審議している。	専攻内にて、新たな研究シーズの発見や、これまでの研究領域の応用展開が期待できる若手教員に対して、海外留学を認めている。今年度は准教授 1 名が依命国外留学の中である。	退職予定者の後任人事案件が生じた場合、後任補充にとどまらず、専攻の将来を見据えた教育研究分野の人材について審議し、枠取り申請ならびに教員公募の要件を設定している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 教員組織の編制方針に記した通り、長所や特色は特にない。	【長所】 地域創成科学専攻の人材育成目標の達成と円滑な学科運営を重視している。	【長所】 十分な業績を有し、学科運営に積極的な若手教員を昇格対象としている。	【長所】 1 研究室あたり 3 名の教員を配置し、留学教員不在時の支援体制を整えている。	【長所】 専門分野の固定化に陥ることなく、時代の要請に応じた適材適所の人材を確保する。
	【特色】 教員組織の編制方針に記した通り、長所や特色は特にない。	【特色】 「地域づくり」という幅広い研究領域に対応している。	【特色】 特になし	【特色】 研究室単位、専攻単位での教育研究指導体制により、留学教員不在時の支援体制を整えている。	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 大学院指導資格を有する教員の安定的な確保に向け、准教授、助教職の教員の研究時間を創出できるようサポートしつつ、定期的に業績チェックを行う。	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名	教員組織の編制方針 設置認可申請書・届出書「設置の趣旨等を記載した書類」オ. 教員組織の編成の考え方及び特色	教員組織の編制方針 設置認可申請書・届出書「設置の趣旨等を記載した書類」オ. 教員組織の編成の考え方及び特色	令和 5 年度 地域創成科学専攻 専攻教授会議事録	下嶋准教授 留学申請書・同意書	令和 5 年度 地域創成科学専攻 専攻教授会議事録

学部・研究科名 地域環境科学研究科
学部長・研究科委員長名 大林 宏也
学科名・専攻名 林 学 専 攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	大学院の講義・実験実習における成績の評価に関する標準化	AP および DP に対応した大学院生の研究成果の構築とプレゼンテーションと論文発表力の向上	
実行サイクル	7 年サイクル（令和 5 年～令和 11 年）	7 年サイクル（令和 5 年～令和 11 年）	年サイクル（ 年～ 年）
実施 スケジュール	①大学院成績評価の現状と課題の明確化 ②上記①を踏まえた実施方策（改善点）の検討 ③上記②の実施方策に沿った評価実施と課題の再確認 ④目標達成に至るまで上記②と③のプロセスを毎年度実施	①専攻開催の研究成果報告会（所信・中間・最終）の実施方法の検討 ②上記①を踏まえた、試験研究計画と実施・プレゼンテーション内容評価方法の提案 ③上記②の評価方法の実施と効果の確認 ④目標達成に至るまで上記②と③のプロセスを毎年度実施	
目標達成を測定する指標	①相対評価を実施する教員数（比率） ②相対評価を実施する科目数（比率）	①全担当教員による改善度評価 ②参加学生の満足度評価	
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	前回の 7 年サイクルの実行では、最終年度の令和 4 年度でも未実施の項目があったため、さらに同サイクルによる実行を目指していく。	前回の 7 年サイクルの実行では、最終年度の令和 4 年度でも未実施の項目があったため、さらに同サイクルによる実行を目指していく。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	とくに無し。	とくに無し。	【長所】 ・
	とくに無し。	とくに無し。	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 とくに無し。	【問題点】 とくに無し。	【問題点】 ・
	【課題】 さらなる評価の標準化を検討。	【課題】 学内外における研究発表の機会の確保と活発化を引き続き支援していく。	【課題】 ・
根拠資料名			

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	大学院（博士後期課程）研究支援制度への対応	森林科学、木質科学分野を対象とした専攻外研究者との共同研究成果の蓄積(研究連携の推進)	
実行サイクル	7 年サイクル（令和 5 年～令和 11 年）	7 年サイクル（令和 5 年～令和 11 年）	年サイクル（ 年～ 年）
実施 スケジュール	①現行の大学院博士後期課程研究支援制度への学生確保の確認 ②次年度に向けた対象学生・対象テーマの選定 ③制度への申請準備支援 ④制度への申請	①競争的資金等を利用した専攻外研究者との共同研究の検討、役割分担の明確化、研究計画・実施の策定 ②競争的資金等の獲得および日本学術振興会特別研究員採択に向けた活動・行動 ③資金・予算獲得できた研究の実施 ④成果の取りまとめと社会化	
目標達成を測定する指標	①（博士後期課程等）対象学生に対する応募者数比率	①競争的資金等の獲得の有無 ②研究成果の学会報告数、論文投稿数、出版著作数	
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	前回の 7 年サイクルの実行では、最終年度の令和 4 年度でも未実施の項目があったため、さらに同サイクルによる実行を目指していく。	前回の 7 年サイクルの実行では、最終年度の令和 4 年度でも未実施の項目があったため、さらに同サイクルによる実行を目指していく。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	とくに無し。	とくに無し。	【長所】 ・
	とくに無し。	とくに無し。	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 とくに無し。	【問題点】 とくに無し。	【問題点】 ・
	【課題】 さらなる支援体制の充実に努める。	【課題】 コロナ禍で生まれたオンラインでのコミュニケーションを活用し、専攻外との共同研究を推進していく。	【課題】 ・
根拠資料名			

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	林学専攻の整備	大学院生の研究・生活基盤の確立支援	インターンシップ科目の活用と進路指導の強化
実行サイクル	____ 7 ____ 年サイクル（令和 5 年～令和 11 年）	____ 7 ____ 年サイクル（令和 5 年～令和 11 年）	____ 7 ____ 年サイクル（令和 5 年～令和 11 年）
実施 スケジュール	<u>①現行研究科の検討と問題点の抽出</u> <u>②森林総合科学科の教育課程改革との関係性の検討</u> <u>③上記①と②を踏まえた専門分野の見直し（内容、名称、科目等）</u> <u>④専攻主任会議および農学研究科委員会への議題提出</u>	<u>①大学院生の生活実態の把握</u> <u>②大学院生向けの研究費・奨学金等の情報収集</u> <u>③大学院生への奨学金申請の促進</u>	<u>①大学院入学時の早い段階で大学院修了後の進路について検討させ、進路目標の設定および具体的計画を策定させる。</u> <u>②インターンシップ科目の受講とインターンシップへの積極的参加を指導する。</u> <u>③適宜、指導教員による進路相談を実施する。</u>
目標達成を測定する指標	① <u>令和 3 年 4 月にスタートした新研究科での研究推進</u>	① <u>学外奨学金応募者数の増加</u> ② <u>奨学金応募者に占める奨学金受給者割合</u> ③ <u>外部の研究支援制度（学振等）への応募支援をはかる</u>	① <u>就職希望学生に対するインターンシップ実施者数</u>
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	前回の 7 年サイクルの実行では、最終年度の令和 4 年度でも未実施の項目があったため、さらに同サイクルによる実行を目指していく。	前回の 7 年サイクルの実行では、最終年度の令和 4 年度でも未実施の項目があったため、さらに同サイクルによる実行を目指していく。	前回の 7 年サイクルの実行では、最終年度の令和 4 年度でも未実施の項目があったため、さらに同サイクルによる実行を目指していく。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	とくに無し。	とくに無し。	とくに無し。
	とくに無し。	とくに無し。	とくに無し。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 とくに無し。	【問題点】 とくに無し。	【問題点】 とくに無し。
	【課題】 新研究科移行による正負の影響への対応	【課題】 さらなる充実に努める。	【課題】 さらなる充実に努める。
根拠資料名			

研究科名地域環境科学研究科

研究科委員長名大林 宏也

専攻名農業工学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	博士前期課程におけるシラバスに基づいた大学院授業の実施
実行サイクル	___ 1 ___ 年サイクル（令和5年度）
実施 スケジュール	前期 4月～7月 シラバスに沿った院授業の実施 後期 9月～1月 シラバスに沿った院授業の実施 12月～1月 令和6年度院授業シラバスの策定
目標達成を測 定する指標	大学院生を対象としたアンケート結果
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	アンケート「授業はシラバスに基づき行われましたか？（内容の変更があった場合は説明がありましたか？）」回答結果において、「強くそう思う」と「そう思う」の回答率が90 %程度となり、シラバスに基づいて授業が行われたと考えられる。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし
	【特色】 ・シラバスに則って授業を実施することで、学習・到達目標や授業科目相互の関係が明確になり学生の理解が促進される。教員は教育内容の評価・点検が容易になり授業の質の向上につながる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・アンケートのみならず、講義中に履修者の理解度も確認しながらシラバスを見直す必要もある。
根拠資料名	・シラバス(例) (A1-①-3) ・授業実施報告書(例) (B1-①-1) ・授業評価アンケート結果 (A1-⑤-1)

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	大学院生に対する国内学会や国際会議などでの発表の推奨
実行サイクル	____1____年サイクル（令和5年度）
実施 スケジュール	4月から適時、農業工学分野における学会や国際会議などの情報を大学院生に周知し、参加発表を促していく。
目標達成を測 定する指標	大学院生1人あたりの国内学会や国際会議など発表回数
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学生による国際会議での発表数は10件、また国内学会での発表数は1件であった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・多くの専門家と意見交換ができ、自身の研究の発展につながる。
	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・国際学会の場合、渡航費が負担となる。
	【課題】 ・東京農業大学大学院生海外研究発表支援プログラムなど、旅費の支援が課題である。
根拠資料名	・海外研究発表支援採択者（B2-①-1）

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	文化的背景を踏まえた専攻内での国際交流の活性化
実行サイクル	____1____年サイクル（令和5年度）
実施 スケジュール	9~10月に専攻内でイベントを開催する。
目標達成を測 定する指標	参加者を対象としたアンケート結果
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	専攻独自のイベントは実施できなかったが、学部国際化活動として外国人教授による基調講演（5月17日、9月14日）、オンランコロキウム（11月27日、12月11日）が開催され、大学院生を参加させた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・世界の動向を見据えた行動ができる素養を持った人材教育が期待できる。
	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・学会などのイベントもあり、日程調整に課題がある。
根拠資料名	・学部国際化推進の活動（A3-④-1~5）

学部・研究科名 地域環境科学研究科

学部長・研究科委員長名 大林 宏也

学科名・専攻名 造園学専攻

1．教育に関する総合的事項

	①
目 標	実学主義、実学教育をもとに、国際的視野により造園学の視点から「人間と自然との共存」を基本とした合理的かつ快適な土地空間を、科学的に創造あるいは保全し、体系化を図ることができる人材の育成を目標とする。
実行サイクル	____ 2 ____ 年サイクル（令和 4 年 4 月～6 年 3 月）
実施 スケジュール	専攻内研究発表会を定期的に行い、研究内容、発表内容の向上を図る。 国際感覚を養うため、造園調査法（演習）などのカリキュラムによる国内外の造園関連大学との交流を実施する。
目標達成を測定する指標	定期的な大学院生の研究発表会における相互の意見交換、アドバイスに対する応答
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	学部協定校であるドイツ_オスナブリュック応用科学大学において 4 大学、計 50 名の大学院生が参加した国際ワークショップが 2023 年 7 月開催され、本専攻の 7 名の大学院生が参加した。 また、同年 9 月には同大学学生達が訪日し、本専攻大学院生とともに世田谷区内の対象地に対するデザインワークを実施した。 IFLA Apr Student Design Workshop2023(日本大会)に参加し、各国の学生とデザインワークを実施、成果物のプレゼンテーションを行った。 東京農業大学大学院研究発表会に専攻内学生が全員参加した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・大学院生が渡独し、海外の大学生と議論、デザインワークを実施し、その成果を発表した。 ・大学院発表会への参加を年間スケジュールに位置付けたことにより、専攻内学生の全員参加が可能になった。
	【特色】 ・国際ワークショップへ出席し、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を高めることができた。 ・ポスター発表の練習になるとともに、専攻外教員からの指導を仰ぐことができた。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・今後の継続的参加のために、経済的側面の仕組み構築が必要である。
	【課題】 ・共同研究の位置付けによる補助金申請により、継続性と助成金の確保が可能になる。
根拠資料名	造園学専攻中間発表会要旨集、最終発表会要旨集 東京農業大学大学院研究発表会資料 IFLA Apr Student Design Workshop2023 報告書

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	豊かな地域社会と社会資本の形成に貢献できる人材の養成を目的とし、大学院生の研究意欲の向上と修士論文・博士論文の質的向上を図る。
実行サイクル	____ 2 ____ 年サイクル（令和 4 年 4 月～6 年 3 月）
実施 スケジュール	東京農業大学大学院研究発表会への参加、国際学会誌への投稿、国際学会ワークショップへの出席・発表、造園学会全国大会への参加の他、関連学会への論文投稿数を増やす。
目標達成を測 定する指標	東京農業大学大学院研究発表会への参加・発表、国際学会誌への投稿数、国際学会ワークショップへの出席・発表数、造園学会全国大会への参加人数、関連学会への論文投稿数
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	全大学院生が大学院研究発表会においてポスター発表を行なった。大学院生 7 名が国際ワークショップに対面で参加した。 日本造園学会全国大会、関東支部大会における発表の増加を図った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・対外的な発表件数の増加を目標としている。
	【特色】 ・日本における造園学の特徴を研究やコンペ作品によって発信している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・専門学(造園)に関わる国際学会やワークショップが増加する中、その重要性や意義について十分に啓発されていない。
	【課題】 ・発表数は増加しているが、今後は研究内容の高度化が必要である。
根拠資料名	・海外協定校との共同研究成果概要(2023 年度) ・日本造園学会学会誌ランドスケープ研究 5 号論文集

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	国際的視野も含めた造園学の産・官・学の連携
実行サイクル	____ 2 ____ 年サイクル（令和4年4月～6年3月）
実施 スケジュール	グローバル時代の多面的な地域環境問題の解決に挑み、自然と共生する地域づくりに貢献できる能力を養うために、国内外のフィールドワークを通じて教育・研究の双方向の視点で連携を推進する。
目標達成を測 定する指標	海外協定校との交流数、産・官との共同プロジェクト数、連携による教育・研究成果の発信
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学部協定校であるドイツ_オスナブリュック応用科学大学にて開催された国際ワークショップへの参加。 産・官・学連携を目指した造園科学科 100 周年記念事業に基づく教育活動を行なった。 IFLA Apr Student Design Workshop2023(日本大会)に参加し、デザインワークの成果品に対して、国内内のデザイナー・プランナーからの講評を受けた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・グローバル時代におけるフィールドワークのあり方や授業・研究を探究した。
	【特色】 ・学部間協定校との MOU 締結後、実際に学生間交流が対面ではかれた実質的成果である。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・産・官・学の連携については、今後も継続的な活動が必要である。
	【課題】 ・産・官・学の連携の現状把握を行い、時代に即した啓蒙及びプログラム展開が必要である。
根拠資料名	・海外協定校との共同研究成果概要(2023 年度) ・オープンカレッジ実施報告 ・造園科学科 100 周年記念事業の案内 ・IFLA Apr Student Design Workshop2023 報告書

学部・研究科名 地域環境科学研究科

学部長・研究科委員長名 大林 宏也

学科名・専攻名 地域環境科学専攻

1．教育に関する総合的事項

	①
目 標	「博士前期課程」および「博士後期課程」が開設される今年度は、昨年度に引き続いて、シラバスに基づいた院授業を着実に実施する。
実行サイクル	1 年サイクル（令和 5 年～ 6 年）
実施 スケジュール	前期 4 月～7 月 シラバスに沿った院授業の実施 後期 9 月～1 月 シラバスに沿った院授業の実施 1 月～3 月 次年度授業シラバスの策定
目標達成を測定する指標	大学院生を対象としたアンケート結果
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学生は積極的に授業に取り組んでおり、出席状況も良好で、授業の内容や方法に関しても一定の評価を得ている。一方で授業到達目標の理解がやや乏しい結果であった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 教員の専門分野が多岐に及ぶこと、様々な地域との連携活動・実績があることから、地域創成科学専攻ならではの教育が可能となっている。
	【特色】 現地調査に加えて、研究室での議論・取りまとめ・プレゼンテーションを実施することで、実践的かつ能動的な教育を行っている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 「目標に対する現状説明」への対応
	【課題】 引き続き、教員と学生との十分なコミュニケーションに努める。その上で、必要に応じて教員が到達目標を説明し、教員に対して気軽に質問・回答できる機会と雰囲気を作る等の対応をとる。
根拠資料名	大学院生を対象としたアンケート集計結果

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	大学院生に対して、各種学会・ワークショップ等への参加を推奨する。
実行サイクル	__1__ 年サイクル（令和 5 年～ 6 年）
実施 スケジュール	4 月から適宜、地域創成科学分野における各種学会・ワークショップ等の開催情報を修士課程の大学院生に提供・周知し、参加を促す。
目標達成を測 定する指標	令和 5 年度中、「参加数／在籍院生数＝1」を目指す。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	在籍院生 15 名（M1：8 名、M2：7 名）に対し、各種学会や研究会への入会を促した。また学会大会、ワークショップ等の開催情報を得るための 指導、情報提供を行った。その結果、目標達成を測定する指標である、参加数／在籍院生数は、前期課程 1 年次で 1.0、2 年次で 1.43（全体で 1.20）となり、目標を達成した。ただし、その詳細は、在籍院生 15 名中 10 名が関連する学会・研究会に入会し、また 11 名が学会大会、各種ワークショップにおいて研究報告（口頭発表、ポスター発表）を行った結果であり、参加や発表に対する個人差が顕著であった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 学会や研究会への参加は、学術分野を巡る状況の理解、資料作成やプレゼンテーションテクニックの習得、コミュニケーションのあり方など研究者として多くのことを学ぶ機会になったものと考えている。
	【特色】 学会・研究会の紹介や情報を得るための手段の周知は入会の促進に、また関連学会の全国大会等の学術発表会のスケジュールの周知は参加や発表エントリーの促進につながる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 アンケートの結果、研究支援の体制に対する満足度がやや低い傾向にあった。具体的な要望としては、国際学会参加も含めた旅費・交通費の不足が挙げられた。
	【課題】 研究データを取りまとめ、全ての院生次年度の学術発表への参加、エントリーを促す。予算配分の最適化。
根拠資料名	アンケート集計結果、指導教員からのヒアリング結果資料

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	専攻および各研究分野における学術交流、地域交流の活性化		
実行サイクル	____ 1 ____ 年サイクル（平成 5 年～ 6 年）	____ 年サイクル（ 年～ 年）	____ 年サイクル（ 年～ 年）
実施 スケジュール	夏季休暇等、長期休暇期間を利用して、ワークショップやイベント の開催、研究交流を推進する。		
目標達成を測 定する指標	参加者を対象としたヒアリングやアンケート等		
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	長期休暇期間に少なくとも 4 名が研究発表や交流にかかわるイベン トに参加した。		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 夏季（8 月、9 月）、春季（2 月、3 月）に研究に関わるイベントの開 催頻度に関係するが、授業がなく時間が取りやすい時期であれば参加 が容易である。	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 学会や研究会のイベントに加え、業界や企業体が主催するイベント等 を紹介できれば、将来のキャリアを検討するための有効な情報にな る。	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 学生自身が各イベントにどの程度参加したか十分に把握ができてい なかった。	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 教員、院生間でイベントに関する情報交換を積極的に行うこと、そし て教員と学生との十分なコミュニケーションにより、参加したイベン トについて把握に努めたい。	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名	アンケート結果資料		